

訪問団の一員として

二十一年一月三十一日、久しぶりに訪れた首都北京は大きく変わっていました。至る所穴ぼこだらけだった四年前の面影はどこにもありません。いくつもの煙突からは多くもくと大量の白煙が出ていました。

今回、空港から降り立った印象はまさしく大都会、街づくりの終わった首都でありました。

巨大なビル郡が林立し、整備された高速道路は最初の視察地、万里の長城までほぼ直で結ばれており約一時間で到着出来ました。前回あちこちで見かけた人民服のひとびとの姿に変わって、洗練されたファッションで着飾った人達が行き交っていました。

天安門広場では前回と同様『巨大な屋根』と前に掲げられている故毛沢東国家主席の遺影を見ることが出来ました。故宮では、権力の象徴である門ごとに設置された金色の玉座をまじかに接し、そのあでやかさにはびつくりしました。また基礎の石材部分にお湯を通し床暖房による防寒対策が講じられており、建築様式は特に興味深いものでした。

何年か前に読んだ『大地の子』の本を思い出し、自分の幼いころの思い出と主人公「陸一

心」のイメージをだぶらせ、回顧の思いを期待していた分、いささかがっかりしました。旧暦の正月が明けたばかりの市街地に人波は見当たらず閑散としており、広場での花火も禁止され、大きな混乱はなかった旨の説明がありました。

気温は浦和市よりは低く、訪れた夕方は零度前後であったようです。夜には最低気温は零下十度近くまで下がり川は全面氷結し、短い滞在期間ではあつたりましたが、その寒さは想像することができませんでした。

翌日訪れた鄭州市は、近代化を急ぐ発展途中の都市との印象でした。



北京と同様で街は閑散としていましたが、煙突からとおぼしき煙がかすんでおり、若干の息苦しさを感じました。まさに四年前の北京市での印象と同じでした。

空港では葛副主任ほかの方々の歓迎を受け、延々と続く農村地帯を高速道路で一時間ほど走行し市役所に到着しました。

鄭州市人民代表大会常任委員会主任岳修武氏の歓迎を受け、それぞれの記念品の交換の後、挨拶に続き意見交換が開始されました。途絶えていた訪問が十年ぶりに再開され、友好都市締結当時の中国側関係者は、外事弁公室の葛文春主任のみとの事で帆足団長との間

で、その歴史と相互訪問の再開の必要性を検討したい旨の挨拶が交わされ、書簡の手渡しが行われました。今後に対する大いなる期待も話し合われ、約三十分で終了。

続いて、人民政府常務副市長を表敬訪問し、記念品の交換に続き訪問団に鄭州市民を代表して、歓迎をする旨の挨拶がなされました。序列では党、政府の順であるとのことでした。続いて行われた晩餐会では和やかな雰囲気の中に十年ぶりの訪問団の交流再開を祝い、約一時間三十分で終了しました。

翌日は鄭州國家高新技术産業開發區管理委員會副主任刘学赫氏を市北東部校外にある現在開発中の工業団地に尋ね挨拶記念品の交換に続き工作機械の工場を視察しました。日本製の工作機械による研磨部品の制作がされており、労働者の月収は約二千元であるとのことでした。

貨幣価値は円の十四分の一です。夜半に街で食べた水餃子は一皿三十個位約3人分で5元であり価格の違いを実感しました。

時差は一時間であり市街地の一部では電飾がなされ夜遅くまで街はにぎわっていました。この国はやがて世界一になるかもしれな

いと感じました。いつの日にか、また鄭州市を訪れ人民の方々の暮らしに接しこの街の発展を確認したいと思いました。

萩原章弘

